

武蔵野日曜聖書講筵 降誕節

徴

――ルカ伝第1章26～38節――

1981年12月20日

小池辰雄

懼るな汝の願は聴かれたり めでたし恵まるる者よ 汝の言のごとく我に成れかし マリヤの讃歌 ギカリヤの讃歌 唯一人者 本願成就 キリストの徴 エン・クリスト 十字架という門から入る 真空に聖霊で満たす 救いの徴は愛 ヨハネ伝は徴の福音 キリストという驚くべき神の徴 祈り

【ルカ1・26～38】

26 その六月めに、御使ガブリエル、ナザレというガリラヤの町におる処女のもとに、神より遣さる。27 この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁せし者にて、其の名をマリヤと云う。28 御使、処女の許にきたりて言う『めでたし、恵まるる者よ、主なんじと偕に在せり』29 マリヤこの言によりて、心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、30 御使いう『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵を得たり。31 視よ、なんじ孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし。32 彼は大人らん、至高者の子と称えられん。また主たる神、これに其の父ダビデの座位をあたえ給えば、33 ヤコブの家を永遠に治めん。その国は終ることなかるべし』34 マリヤ御使に言う『われ未だ人を知らぬに、如何にして此の事のあるべき』35 御使こたえて言う『聖霊なんじに臨み、至高者の能力なんじを被わん。此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。36 視よ、なんじの親族エリザベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女といわれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。37 それ神の言には能わぬ所なし』38 マリヤ言う『視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし』ついに御使、はなれ去りぬ。

● 懼るな汝の願は聴かれたり

おはようございます。大変、大勢よくいらつしやいました。いよいよ今年も最後となりました。一年間を省みて、非常に私にとっては大事な年でありました。春にはイスラエルに行き、秋には中国に行ったという二つの外地旅行があったわけですが。いろんな意味でこのクリスマスは私にとって特別なクリスマスであるようです。皆さんもそれぞれ意味を



お持ちだと思いますが。

この集会を始めてもう40年で、クリスマススを40回迎えているわけですが、毎回新しいですね。全世界でクリスマススの祝いが多分、今日とか24日、25日あたりにあるわけですが、何と言っても、キリストは絶対に唯一なる人です。もう、私は言葉が爆発しそうで困るんですけども、キリストの誕生の前ぶれとして、ルカ伝1章、2章は大変なところです。よくこれだけ記してあると思つて驚嘆します。1章の5節に、

5 ユダヤの王ヘロデの時、アビヤ組の祭司に、ザカリヤという人あり。その妻はアロンの裔すえにて名をエリサベツという。……さてザカリヤその組の順番まわりに当たりにて、神の前に祭司の務めを行うとき

と。ザカリヤはレビ族の中の第八組に当たるんですけども。エリサベツはうまずめである。ところが、とうとうヨハネというのが与えられる。それから遅れて、マリヤにイエスが与えられる。そして、このヨハネが洗礼のヨハネとなり、キリストの最後の預言をする。そのことはもう既にザカリヤに示されているわけです。11節に、

11時に主の使つかいあらわれて、香壇の右に立ちたれば、¹²ザカリヤ之を見て、心騒ぎ懼れを生ず。¹³御使みつかいいう『ザカリヤよ懼おそるな、汝の願は聴かれたり。汝の妻エリサベツ男子を生まん、汝その名をヨハネと名づくべし。

と。マリヤも懼れました。30節に、

30御使みつかいいう『マリヤよ、懼おそるな、汝は神の御前めづみに恵を得たり。

と。次元の違った事態が現れる時には、低次元にいる相対次元にいる者は懼れを感じるわけです。けれども、この聖霊の次元は喜びの次元なんです。14節に、

14なんじに喜よろこびと歡樂たのしみとあらん、またおおくの人もその生まるるを喜ぶべし。

15この子、主の前に大おほい、また葡萄酒と濃き酒とを飲まず、母の胎を出づるや聖霊にて満たされん。¹⁶また多くのイスラエルの子らを、主なる彼らの神に帰らしめ、¹⁷かつエリヤの霊と能力ちからとをもて、主の前に往かん。これ父の心を子に、戻もどる者を義人の聡明さとしに帰らせて、整えたる民を主のために備えんとてなり』

と書いてある。旧約の預言者エリヤの再来のごときがこの洗礼のヨハネであるという。力ある霊ということですね、「霊と能力」と言つても。聖霊のことです。

このザカリヤに現れた天使がガブリエルで、側近の天使のうちの一人です。

「ガブリエール」

というのは

「神の勇者」

という意味です。サタンとの戦いをやる天使で、勇ましい天使である。19節に、

19御使みつかいこたえて言う『われは神の前に立つガブリエルなり、汝に語りてこの



嘉き音信を告げん為に遣さる。

と。ザカリヤとエリサベツの間のヨハネという、特別な誕生であるわけです。旧約の預言がたくさんありますが、その最後の預言者です。

「預言者のうちの最も大いなる者」

とキリストが言われたくらいですから。

●めでたし恵まるる者よ

26節に、

26 その六月めに、

というの、その前に、

24 此の後その妻エリサベツ孕りて五月ほど隠れおりて言う、²⁵ 『主、わが恥を人の中に雪がせんとして、我を顧み給うときは、かく為し給うなり』

というので、そのエリサベツがみごもりてから六月めということ事です。

御使ガブリエル、ナザレというガリラヤの町におる処女のもとに、神より遣さる。

この処女の血筋のことは書いてない。

27 この処女はダビデの家のヨセフという人と許嫁せし者にて、其の名をマリヤと云う。²⁸ 御使、処女の許にきたりて言う 『めでたし、恵まるる者よ、主

なんじと偕に在せり』

「ベアトリーチェ」という言葉がありますが、「恵まれたる者」ということです。

29 マリヤこの言によりて、心いたく騒ぎ、斯る挨拶は如何なる事ぞと思ひ廻らしたるに、³⁰ 御使いう 『マリヤよ、懼るな、汝は神の御前に恵を得たり。

³¹ 視よ、なんじ孕りて男子を生まん、其の名をイエスと名づくべし。

「神の救い」という意味です。

³² 彼は大ならん、至高者の子と称えられん。

畳みかけてえらいことを宣言されてしまうものですから。

また主たる神、これに其の父ダビデの座位をあたえ給えば、³³ ヤコブの家を永遠に治めん。その国は終ることなかるべし』³⁴ マリヤ御使に言う 『われ未

だ人を知らぬに、如何にして此の事のあるべき』³⁵ 御使こたえて言う 『聖霊

なんじに臨み、至高者の能力なんじを被わん。

これも「聖霊と能力」で、さっきの「霊と能力」と同じです。力ある霊です。まあ、処女

降誕をどうのこうのと言う人は、言わせておけばいい。我々はもう聖書のまま信ぜざるを得ない。

此の故に汝が生むところの聖なる者は、神の子と称えらるべし。



聖霊のことを「スペルマタ」「種」という言葉でもヨハネ書簡には書いてある。神の種ですから、ある意味において。具体的に霊の力がマリヤに加わるわけです。

36 視よ、なんじの親族エリザベツも、年老いたれど、男子を孕めり。石女といわれたる者なるに、今は孕りてはや六月になりぬ。37 それ神の言には能わぬ所なし』38 マリヤ言う『視よ、われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし』 ついに御使、はなれ去りぬ。

何のことか分からんです。常識では、また自分の判断では分からない。

● 汝の言のごとく我に成れかし

「われは主の婢女なり。汝の言のごとく、我に成れかし」

と。「言のごとく成る」というのは「誠」です。誠という漢字は素晴らしい字だと思う。神の言は必ず成る。それが本当。それから、

「我は真理なり」

とキリストが言われた。あれはこの「誠」なんです。実現しないものは真理でない。観念でないから。聖書の真理は実現すること。実証的なものです。私は無教会時代は、その真理というものがだいたい観念的であった。キリストが、

「我は真理なり、道なり、生命なり」と言う。これはみんな定冠詞が付いている。

「我こそは道である、生命である、真理である」

と、定冠詞が付いているのをむしろ日本語で訳すなら、「我こそは」という、「こそは」くらい付けたらいい。キリストの道は老子の道以上の道ですから。

老子も素晴らしい。中国では老子が一番だと私は思いますけれども。『老子』というのはそう長い本ではない。しかし、非常に余韻のある弾力性のある本です。無道の道、道無き道。キリストも正に無限軌道で道無き道です。もし、「これが道である」と言うならば、キリスト自身が「我は道なり」で、概念では限定できない道です。

また、概念で限定できない「生命」です。光、「我は光なり」という。もう何とでもいい。愛でもあり、義でもある。みんなこれは同じなんです。キリストという驚くべき内容いろいろな光を放つから、それをいろいろな言葉で言わざるを得ない。全部これは円還関係になつていて。バラバラではない。有機体的なんです。それはみんな神の実体ですから。実証、体現者です。

「言は肉となつた」

という。「ロゴス」は神であつたが、神的なものであつたが、それが天界から霊界から、

「我はアブラハムよりも先にありし者」

が現れた。ナザレのイエスとしてベツレヘムの馬小屋に現れた。後の方に書いてあるでしょ、



「それが徴だ」と。この徴というのは神の徴なんです。だから、

「どうも、キリスト教は……」

だとか、

「神さまはいるんだか、いないんだか」

とか、若いのがいろんなことを言うよ。何とでも言わせておけばいい。

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書にきて、キリストにぶつかって、そしてキリストにおいて神を見ない人は、永遠にいつまでも神は見えない。キリストだけが本当の神の実証者だから。もうあとは何も議論はいらん。

「ここ（キリスト）に神を見ないやつは見れない」

と、それだけのことをはつきり、聖霊の権威で言えますから。

だから、キリストは本当の神の言が100%に成就している者。この「誠」というのはキリストを表している。我々では完全に言葉は成就しないんだよ、なかなか。罪びとだから、ずれているから。

大変な言葉です、この「誠」という字は。漢字は素晴らしい。世界最高の文字です。中国でも漢字を少し略しているから、

「ダメだ。なぜ略すか」

と言ってやった。

「汝の言のごとく、我に成れかし」

と。これは「成れかし」と言って、いい加減に言っているのではない。自分を神さまの下にマリヤは投入した。投げ込んだ。全身を任した。「投身」というのはいい言葉だ。全存在を投げ出すこと。神の懐の中に投げ出す。私たちはキリストの懐の中に投げ出す。

「信ずる」

なんていう言葉は困るよ。

「信仰」

なんてのは。これが躓きになっている。もったいぶって、「信仰」なんて言う必要はなにもない。投げ出せばいい、キリストの中に。祈りがそうですよ。そういう祈りをやっているでしょうね。俄然、聖霊が来てしまうですから。

だから、

「われは主の婢女なり。主の僕なり。汝の言のごとく、我に成れかし」

と。神の言は実言だから、実の言葉だから、必ず実に現する、実現する。

●マリヤの讃歌

46節にきて、こここのところを「マリヤの讃歌」「マグニファイカート」という。



46 マリヤ言う『わが心、主を崇め、^{あが}47 わが霊は、わが救主なる神を喜び奉る。この「心」は「プシヘー」という字で、「魂」という字です。「霊」は「プニューマ」です。魂・霊なんです。

48 その婢女の卑しきをも顧み給えばなり。視よ、今よりのち万世の人、われを幸福とせん。

「幸福」というのは恵福、恵まれたる幸いです。

49 全能者、われに大なる事を為し給えばなり。その御名は聖なり。50 その憐憫は代々、^{かしこ}畏み恐るる者に臨むなり。51 神は御腕にて、^{ちから}権力をあらわし、^{おも}心の念に高ぶる者を散らし、52 ^{いきおい}権勢ある者を座位より下し、^い卑しき者を高うし、53 飢えたる者を善きものに飽かせ、^{すく}富める者を空しく去らせ給う。

いわゆるこの世ではばのきいている者はみんなひっくり返されてしまう。

もし、「権勢」というならば、聖霊の力、聖霊の権威を持てばいい。「卑しき」というならば、もう無になればいい。「飢えたる」と言うならば、キリストに飢えればいい。

「富める者を空しく去らせ」

とは財のことですけれども、財は有れども無きがごとし。神さまのために使えば、いくらお金があつたついてもいい。お金があるかないかということだけをただ問題にしているのではないので、心が奢り高ぶることがこの「富める」というわけです。とかく、いわゆる金持ちというのはケチで自分のことばかり考えているから、そういうのは地獄行きだということ。

54 また我らの先祖に告げ給いし如く、55 アブラハムと、その裔とに対する憐憫を、永遠に忘れじとて、僕イスラエルを助け給えり』

これが

「マグニファイカート」

と言います。まあ、マリヤが果たしてこれだけのことを言ったかは、学問的には別問題ですけれども。しかし、このマリヤの心を代わって書いたという。代わってと言っても、マリヤの中にももちろんこういったような気持は来てます。

●ザカリヤの讃歌

今度はザカリヤは、

「そんなことがあるか?」

と思ったから、口がきけなくなりました。ところが、やつと解けて、神を讃えるというところが64節に書いてある。

64 ザカリヤの口たちどころに開け、舌ゆるみ、物いいて神を讃めたり。65 最寄に住む者みな懼をいただき、又すべて此等のこと遍くユダヤの山里に言い囃されたれば、66 聞く者みな之を心にとめて言う『この子は如何なる者にか成らん』



主の手かれと偕に在りしなり。⁶⁷斯て父ザカリヤや聖霊にて満たされ預言して言う⁶⁸『讚むべきかな、主イスラエルの神、その民を顧みて贖罪をなし、⁶⁹我等のために救の角を、その僕ダビデの家に立て給えり。』

旧約に「贖罪」ということがずつと、ことに預言者においてはしばしば出てきます。不信の罪を赦して、救いにもつていくことが贖いですから。しかし、贖いを徹底的にやったのはキリストの十字架ですけれども。この68節から79節までのザカリヤの歌は

「ベネディクトゥス」

という。

⁷⁰これぞ古えより聖預言者の口をもて言い給いし如く、⁷¹我らを仇より、凡て我らを憎む者の手より、取り出したもう救なる。⁷²我らの先祖に憐憫をたれ、その聖なる契約を思し、⁷³我らの先祖アブラハムに立て給いし御誓を忘れずして、⁷⁴我らを仇の手より救い、生涯、主の御前に、⁷⁵聖と義とをもて懼なく事えしめ給うなり。⁷⁶幼児よ、なんじは至高者の預言者と称えられん。これ主の御前に先立ちゆきて其の道を備え、⁷⁷主の民の罪の赦による救を知らしむればなり。

悔改めの洗礼をやりましたね。そのことが預言されているわけです。

⁷⁸これ我らの神の深き憐憫によるなり。

本当にキリストの道備えをヨハネはやるわけです。キリスト自身もヨハネから洗礼を受ける。

この憐憫によりて、朝の光、上より臨み、⁷⁹暗黒と死の蔭とに坐する者をしてらし、我らの足を平和の路に導かん』

「平和の路」でなくて、「平安の路に導かん」という。

⁸⁰斯て幼児はややに成長し、その霊強くなり、イスラエルに現るる日まで荒野にいたり。

そして、預言者として「荒野にいた」ということが書いてある。

だから、ヨハネとキリストの誕生が実に美しく相呼応して書かれている。

●唯一人者

それから、2章にいきまして、戸籍の云々ということが書いてある。

1その頃、天下の人を戸籍に著かすべき詔令カイザル・アウグストより出づ。
2この戸籍登録は、クレニオ、シリヤの総督たりし時に行われし初のものなり。
3さて人みな戸籍に著かんとて、各自その故郷に帰る。⁴ヨセフもダビデの家系また血統なれば、⁵既に孕める許嫁の妻マリヤとともに、戸籍に著かんとて、ガリラヤの町ナザレを出でてユダヤに上り、ダビデの町ベツレヘムという所



に到りぬ。

ダビデの町ベツレムにやって来た。

6 此処に居るほどに、マリヤ月満ちて、7 初子をうみ之を布に包みて馬槽に臥せたり。旅舎はたじやにおる所なかりし故なり。

ところが、宿屋がない。仕方がなしに、マリヤは月が満ちたものだから、子を馬槽うまぶねに寝かせた。旅舎はたじやがなくなってしまったからね。そういう、キリストは馬槽に寝かされるといふ一番どん底の生まれ方をしたわけだ、キリストにふさわしい生まれ方を。

その当時はローマの世界的皇帝のアウグストウスが君臨していた。当時の第一人者といわれる。大変なローマ帝国の隆盛の極致の時です。その片田舎に、第一人者でない、唯一人者、唯だ一人の人が生まれた。非常なコントラストです。この唯だ一人の人は王宮の中に生まれたのではない。馬槽の中に生まれた。

8 この地に野宿して夜、群を守りおる牧者ひつじかいありしが、9 主の使その傍らに立ち、

主の栄光その周囲を照したれば、甚いたく懼おそる。

何しろ、キリストの誕生には星が現れているし。

まあ、この相対的な次元は、人間がどんなことがあつたつて、世界はうまくいかない。もう聖書が言っている通り、やがては大変なことになる。

20世紀は危ないですね、正直。大きな地震だの、饑饉だの、戦争だの、天変地異だのを、預言者も使徒たちもそのことを預言させられている。もう何がどうなつても、絶対次元の現実の中に入らなければ。また、そこに入れることが救いなんです。あまり救いを安閑に考えすぎている。いわゆる

「我々の信仰」

なんていうもので救われるか。冗談じゃない。

●本願成就

キリストは、

「汝の信仰、汝を救えり」

と仰ったけれども、

「汝の信仰」

というものはひとつもサムシングではない。「汝の信仰」というのは、

「お前は自分を何ものともせず、自分をあてにしないで、神・キリストをあてにした、そのことだけが救いだぞ」

ということですよ。こちらは、救いは本願で臨んでいるんだから、本願が成るんですから。これが成就する。本願成就ほんがんじゆうじゆということ。これが「誠」なんです。本願成就が救いなんです。我々の願いが救いをもたらすのではない。願いは願いでいいよ。しかし、願いが何かではない。



これはもう非常にはつきりしている。

だから、この本願成就の現実は何かというところ、神の霊の働いている現実、神霊の在るところ。預言者も使徒たちもこのキリストを中心にしてみな神の霊に与かった者です。今日はその世界に入ってくださいよ。私は散歩したようなものの言い方をしていられるけれども。

ここでも、御使が野宿の牧者たちに、

10 御使かれらに言う『**懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を我なんじらに告ぐ、**

と。直訳すると、「大歡喜を福音する」ということです。

「大なる歡喜を福音するぞ、与えるぞ」

と。「懼るな」とは、

「懼れなき世界に入れてやるぞ」

ということだ。もう、この世界に入ったら、何もこわくなくなってしまう。

「**恐るな**」

なんて言ったって、相対次元にいればいつまでたっても恐れるんだ。恐れたり、疑ったり、妬んだり、悲しんだり。情けないんですよ、人間というのは。人を見たり、どうのこうのと噂したり。バカみたいなもんです。

それがもう、この世界に入ってしまうと、何と言われようが、私は一向差し支えない。その世界に入れられたから。これは全世界が何と言っても、私は救われている。聖霊が来てしまったから。皆さん一人びとりが

「**ぞうです**」

とはつきり言えなくては。あなた方一人びとりが。

「**自分の信仰なんか問題にしてません。過去も現在も未来も、相対的な自分がどうのこうのと、そんなことは問題ではありません**」

と、もの凄いとところにグーッと入ってしまう。もう私はこういうことを言っていると、異言が出そうになる。

キリストのこの恵みは――「恵み」という言葉もあてはまらないんだけど――この現実、使徒たちが本当にそこに入りました。パウロ、ペテロ、ヨハネ。ペンテコステを通して。パウロはダマスコ途上でひっくり返されて。彼らはその証し人なんだ。彼らはみんな聖霊の徴です。我々がこの聖霊の徴になるまではダメなんです、どんなに立派そうにみえても。しかしながら、どんなにガタガタであつても、

「**あの中には本ものが生きていますぞ**」

と、そういう人にならなくては。それが御霊の徴です。



●キリストの徴

私は無教会の流れに育った男だ。だけれども、無教会の人たちがこの聖霊の徴を本当に受けないから、

「小池さん、あなたは本ものだった」

と、一人も言ってこない。いいよ、地上にいるときは言われなくなつた。そのうちに、どうにもならなくなつて、御霊を受けてから、

「やつぱり、あれは本ものだった」

と、私の書いたものを読めば、そのことは分かる。私は頭で書いてませんから。もうたまらんです、この世界に入ったら。本当に何とも言えない生命の世界、光の世界ですから。

私の兄貴は終りの数年間、素晴らしかったです、正直、今思うと。その頃は、私はまだ

「ヤソ教は」

なんて言つて、およそ宗教とは関係のないところにいた。兄さんの生き方は感心していたけれども、何かこうね、「ヤソ教は」なんて、生意気なんです。そう生意気でもなかったんだけど。まあ、生意気なんだな。しかし、兄貴は本当にキリストに掴つかまれていた、非常にはつきりした生き方をしました。あれは本当に、今考えると、兄貴は終りの数年は徴であった。彼自身が徴――「徴」というのはキリストの証者と同じこと――そういう徴にならなければダメです、我々は。

11 今日ダビデの町にて汝らの為に救主すくいぬしうまれ給えり、これ主キリストなり。

12 なんじら布にて包まれ、馬槽うまぶねに臥ふしおる嬰兒みどりごを見ん、是その徴なり』

「徴」は「セイメイオン」という字です。ヘブライ語では「オーツ」という。旧約のことを言いだすと大変だ。これは注目すべき言葉だ。

「馬槽うまぶねに臥ふしおる嬰兒みどりごを見ん、是その徴なり」

と。あちらの部屋には幼児がたくさんいるけれども、あれはみんなキリストが愛した徴なんだ。徴がだんだん消えてしまふんだ、大人になると。

「幼児おさなごの如くにならずば天国に入れない」

というのに、みんな天国は嫌いだとみえて、だんだん徴がぼけてしまう。「しるし」の「し」の字もなくなってしまう。本当は、この徴をこの部屋に入れてあげればいいんだけど、あまり徴がにぎやかだから(笑)。

13 忽たちまちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、14 『いと高き

所には栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』

これは、

「いと高き所には栄光、神に現れ、地には平安、主の悦び給う人に臨めり、
ということ。むしろ、

「現れ、臨めり」



という言葉を入れていんです。そういう言葉はありませんよ。ありませんけれども、この祈りよりも前に、既に現れてそして臨んだ。だから、

「いよいよ栄光があるように、また人にあるように」

という、またその祈りはなりますけれども、現実を見て言っているんです。栄光が現れたんです。人には臨んだんです、平安が。平和ではない。平安です。平安のないところに平和は来ないですから。

だから、私は手紙にいつも「平安」と書くんです。

「あなたに平安がありますように」

という意味で。私の手紙を受けとった人はみんな見たでしょ。必ず書くから。

「シャーローム」

です。神との深い交わりの中を平安という。必ず力が来ます。ボヤツとしているのではないんです、この平安というのは。

●エン・クリスト

そこで今度は、

22 モーセの律法に定めたる潔けいよめの日満ちたれば、彼ら幼児を携えて、エルサレムのぼに上る。……25 視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔にしてイスラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上に在すいま。

この「慰められんことを」というと、思い出すのはイザヤ書40章の言葉ですが、

「慰めよ、慰めよ、わが民を慰めよ」

という。イザヤ書は旧約聖書の一番深いところですよ。

「1 なんじらの神いいたまわく、なぐさめよ汝等わが民をなぐさめよ。2 懇ろにエルサレムに語り之によばわり告げよ、その服役の期すでに終り、

というのは、バビロニア捕囚のこと。

その咎とがすでに赦されたり。そのもろもろの罪によりてエホバの手よりうけしところところは倍したりと。」(イザヤ40・1～2)

そして10節、

「10 みよ主エホバ能力ちからをもちて来りたまわん。その臂かひなは統治すべおさめたまわん。賞賜たまものはその手にあり。はたらきの値はその前にあり。11 主は牧者のごとくその群をやしない、その臂かひなにて小羊をいだし之をその懐中ふところにいれてたずさえ、乳をふくまする者をやわからかに導きたまわん。」(イザヤ40・10～11)

と。非常に潤いの深い言葉ですね。イザヤ書7章14節に不思議な言葉がある。

「14 この故に主みずから1の予兆しるしをなんじらに賜うべし。視よ、おとめ孕はらみて子をうまん。その名をインマヌエルと称うべし。」(イザヤ7・14)



キリストの預言みたいなところですよ。「インマヌエル」というヘブライ語は

「神我らと共に」

という意味です。キリストは別名「インマヌエル」と謂うとマタイ伝に出ている。

「ゴット・ウイズ・アス」(神我らと共に)

という。我々にとっては、

「クライスト・イン・アス」(キリスト我らのうちに)

の方が大事だ。キリストは我々の中にと。だから、

「イン・クライスト」

「エン・クリスト」(キリストの中に)

という。この『エン・クリスト』という季刊誌は、皆さん、観念にしてはダメですよ。

「キリストの中に本当に自分はいるかどうか」

ということですよ。

● 十字架という門から入る

新しい方に申します。また私自身にも言います。

「キリストの中に入るにはどうしたらいいか」

いきなり入れないんです、我々は

「我は門なり」

という十字架が門です。この十字架という門から入る。みんな、キリスト教は十字架だと思っ

思っていますね。いいですよ。これは「罪の贖い」の徴です。

「罪」というと、「私の罪」と、こう思うでしょう、みんな。「私の罪」ではない。「我、そのものが罪」なんです。「我、という罪」なんです。みんな、誰でもみんな自、我がある。

神さまの恵みというのは非常に不思議なものでね、誰でも自我があつていいんです。みんな、我というものがある。人真似なんかする必要はない。そして、この自我が、みんなどういうように在っても構わないという自由をいただいている。だから、

「自由だ、民主だ」

とか何とか言ってる。さあ、

「この自由をどう使うか」

が問題なんです。我々はみんな顔が違う、みんなそれぞれ天下一品なんです。大いに自覚していいんです、その自我は。道徳的な自覚においてその自由を使ってどのように選択しているのか、というのは道徳の範疇の世界です。それも悪くはない。だけれども、行き詰まる。ヘタすると偽善になる。

この自由は、どういうことに使うかということ、

「神さまに従うということのために使う自由」



なんです。「神さまに従う」というと、

「それでは、自由ではないではないか」

と。神さまに従うということを選択すること。

「自分に従うか、人に従うか、神さまに従うか」

の三つあるよね。自分自身で行く。人任せで行く。どれを選んだっていいよ、それは自由なんだから。ところが、その自由は、

「神さまに自分は絶対依存している」と。

と。キリストはそういう自由を持っていた。

「**汝の御意を、どうぞ、私を通して成ってください**」

と。マリヤのさっきの祈りをキリストは実践しました。あれはキリストの祈りに移りました。

「**御意を成させたまえ。どうぞ、この私を全的にお使いください**」

と。全的にです。

「98%はあなただけでも、2%は私に残してください」

ではないんだから。全的に。こっちは「0」です。だから、100%に神さまに任せたのはキリスト一人なんです。自分をゼロにした。だから、私はキリストを、

「無者」

と申しあげている。どこがわるいか。世界中にキリストのことを無者と言ったのはどこにもいないんだ。キリストは本当に100%に。だから、

「無即無限無量」

になったと言っている。無即無限無量を手離してできたのはキリストだけ。お釈迦さんはそこまできなかつた。お釈迦さんはやつと悟った。さんざんいろんなところを通ってお釈迦さんも最後は凡我一如の世界に入った。

だけれども、キリストははつきりしているんだ。12歳くらいのキリストはもう既に、

「**なぜ、私をこんな所に捜しにきますか。私は父の家にいるんですよ**」

と。「善き先生」と呼ばれたら、

「**なぜ、私のことを善いと言うか。神さまの他に善いものはあるか**」

と。徹底的に自分を否定している。無にしている。そうすると、100%に徹底的に神さまを肯定している。それを「信仰」と称うんです、もし信仰と称うなら。キリストは神さまに絶対依存して、自分は神さまの僕となると、そうするとこれは本当の自由の世界である。

ルターが『キリスト者の自由』において、

「キリスト者は何ものにも依存しない自主の者である」

と言った。「ただキリストにだけ依存する」とは書いてないけれども、そのことなんです。

「また、一切のものに依存する」

と。ということは、「僕となる」ということ。キリストの僕となるから、全ての人に仕える。



「仕える」ということは担う態勢なんです。そういった仕えることが何か屈従のようなことに思えるかもしれないが、そうじゃない。仕える、奉仕するというのは、力があるから奉仕ができる。聖霊の力なんだ。

●真空に聖霊で満たす

だから、今言った十字架でもって己が、自我というものがすつ、飛びました。相対的人間小池は終りまで罪びとにすぎません。けれども、絶対的な小池がその奥にいるんです。それが完全に贖われているから、100%に贖われているから。そこは真空になつていない。神さまはそれを真空にしておかない。何で満たすかというのと、聖霊で満たす。聖霊です。だから、

「十字架を本当に受けとれば必ず聖霊がくる」

と言っているのに、

「十字架、十字架」

と教会でも無教会でも言いながら、ひとつも聖霊がやって来ないではないですか。本当に十字架を受けとってないからです。観念だから、気安めだから、命題だから。私もさんざん永いこと無教会でその状態にいた。観念がただ悪いとは言わないけれども。

描かれた月を見て、月だと思つているのと同じこと。水を汲んで、そしてそこに月影が宿るような、月影を宿すようなことにならなければ、月を本当の意味において見ているわけではない。

みんな本当の世界は、さっきの「誠」は全部、一如の世界なんです。

「汝が我が、我が汝か、分からないような世界」

です。すげね、

「我と汝」

という対立的な意識が非常に西洋人は強い。むしろ、我々東洋人はこの一如の世界をつかみやすいわけなんだ、本当は。なにも西洋の真似ばかりする必要はないんだ。この一如は、なにもボケているんじゃないですよ。

「天上天下唯我独尊」

が言えるんです、本当の意味で。「唯我」の「我」は、キリストと一つとなったこの我は本当に尊いということですよ。この「尊い」というのは、キリストを讃える意味です。それが徴なんです。キリストと一如になったときに、初めてそれが本当の徴です。この徴が現れるというのと、「言い逆らわれる」んです、相対的な次元のものから。それがさつき読んだところの一番後に書いてある。

「キリストは、あるいは立ち、あるいは倒れんがための徴となる」

と。光か闇かと。だから、本当のクリスチャンはいろいろなることを言われる。除け者にされる。結構です。逆にこつちが包んでやる。担ってやる。私は「戦う」と言つたって、決



していわゆる相対的意味で「戦う」なんて言っているのではない。本当の戦いは相手を救いあげてしまう、担いあげてしまう、包んでしまう。何と言われようと、可哀相だなどという。私は、無教会だとか、この集会から出ていったご連中が可哀相でしょうがない。私の讚美歌にも歌ったでしょ。何を相対的な判断しているかと。

●救いの徴は愛

私たちはせっつかくキリストという、神さまのもの凄い徴を迎えたんだから、我々はキリストの徴とならないで、何がこの降誕節かと。我々自身がキャンドルにならなければ。

「汝らは世の光なり。私がお前の中に入って光となるぞ」

ということですよ。それが医学の道であろうと、農業の道であろうと、芸術の道であろうと、学問の道であろうと、事業の道であろうと、何でもみんな徴になる。学生は学生の徴があるんです。徴の宗教なんです。

「ユダヤ人は徴を求めて、けしからん」

というのは、ただ現象だけを求めるからダメだということ。この徴は本体の徴なんです。現象を何か問題にしているのではない。本体と現象が一如になっている世界です。だから、病が癒されたらば、癒されたことだけを感じないで、その病を癒すところの力の実体に向かつて自分が突き進んでいなければ、癒された人は本当の幸いにならない。

皆さんは、本当に聖霊の恵みを人に与えて、人を幸いにし救う、その徴。これは救いの徴だ。救いの徴は即ち、一言でいうならば、愛なんです。愛は最大の力を持っている。ゲートルというあの大詩人は、

「すべては神の愛の現象である」

と言った。「メタモルフオーゼ」です。

「兄弟愛であろうと、母の愛であろうと、恋愛であろうと、人のために己を捨てる愛

であろうと、全部、神さまの愛のいろんな現れ方なんだ」

と。さすがはゲートルはでつかいす。「エロース」だの「アガペー」だのと、そんな分類ばかりしてない。一番深い愛はもちろん己の生命を捨てる愛です。

もう一如の世界から無限の展開をしますからね。まあ、今度の『無の神学』（1982年刊）をご覧になれば分かるけれども。「無」なんて言うから、あれは躓きになるね。虚無ではないんだから。無の中心はキリストなんだ。キリストが無の焦点ですから。焦げて火のごとき点だ。ドイツ語でも「燃える点」という。

聖霊は、聖霊降臨のときは、この火に例えられたでしょ。あるときは、風に例えられる。あるときは、水にも例えられる。これはしようがないよ。「地水火風」という。聖霊の力は担いのごとくだから、地でもある。大地のごとく。地水火風は結局、聖霊だ。「四大」という。それを全部総称して、「無」ともいい、「空」ともいう。もう表現できない。あまりもの凄くて。



とても楽しいでしょ。

●ヨハネ伝は徴の福音

「徴」を少し見ようかね。ヨハネ伝にたくさん出ていているから。ヨハネ伝は徴の福音と言ってもいいね。「第一の徴」が2章11節に出ている。

「ヨハネ此の第一の徴をガリラヤのカナにて行い、その栄光を顕し給いたれば、弟子たち彼を信じたり。」(ヨハネ2・11)

あの婚筵で葡萄酒がなくなつてしまつて、水を葡萄酒に変えてしまつた。大変なひとだよ。あらゆる液体のものは水ではないですか。無色ではないですか。無色、無味だ。ところが、この無色無味なるものがいろんな味を付けるんだから。水がなかつたら、食べ物はどうにもならん。

あなた方、こうやつて空気を瞑想してごらんよ。見えるかい。見えない。見えないけれども、空気に包まれ、空気を吸っている。これほど在るものはない。我々の肉体的存在に空気ほど密接なものはない。それがひとつも見えない。魂がキリストの靈気を吸うようになってごらん。それに満たされたら、断食してもお腹がすかない。断食は、キリストを食らわんがための断食で、修養でも我慢でも何でもない。私はあの修養会という名前は嫌いだ。よく言うね、修養会とか、何とか集会とか。

「われを食べ、飲め」

とイエス自身がヨハネ伝6章で言っている。

「この人は何ごことを言うか」

とユダヤ人が驚いている。そういう世界を、そういう現実を、本当にドラマだから私は、「聖書は身体からだで読みなさい。目で読むのではない。身体で読め」と言っている。身体で、身しん読とくせよと。日蓮さんの言葉だ。

「²³過越のまつりの間、イエス、エルサレムに在いますほどに、多くの人々その為し給える徴を見て御名を信じたり。」(ヨハネ2・23)

「²夜イエスの許もとに來りて言う『ラビ、我らは汝の神より來る師なるを知る。神もし偕いに在いまさずば、汝が行うこれらの徴は誰もなし能わぬなり』」(ヨハネ3・2)

それから、4章には「第二の徴」が出ている。46節からあとに書いてある。

「⁴⁶イエス復ガリラヤのカナに往き給う、ここは前に水を葡萄酒になし給ひし処なり。時に王の近臣あり、その子カペナウムにて病いいたれば、⁴⁷イエスのユダヤよりガリラヤに來り給えるを聞き、御許にゆきてカペナウムに下り、その子を医いし給わんことを請う、子は死ぬばかりなりしなり。⁴⁸ここにイエス言ひ給う『なんじら徴と不思議とを見ずば、信ぜじ』⁴⁹近臣いう『主よ、



わが子の死なぬ間にくだり給え』⁵⁰イエス言い給う『かえれ、汝の子は生くるなり』彼はイエスの言い給いしことを信じて帰りしが、⁵¹下る途中、僕どもも行き遇いて、その子の生きたることを告ぐ。⁵²その癒えはじめし時を問いに『昨日の第七時に熱去れり』という。⁵³父その時の、イエスが『なんじの子は生くるなり』と言ひ給いし時と同じきを知り、而して己も家の者もみな信じたり。⁵⁴是はイエス、ユダヤよりガリラヤに往きて為し給える第二の徴なり。』(ヨハネ4・46～54)

パツと治つてしまつた。死んだと思つたら生きてゐる。「汝の子は生くるなり」と。

「⁴⁸ここにイエス言い給う『なんじら徴と不思議とを見ずば、信ぜじ』」

と。キリストの徴を見ないと信じないが、

「私自身が徴だよ。私を本当に信ずれば、受けとれば、徴はみんな分かるよ、お前もまた徴の人になるよ」

ということなんだ、キリストが言おうとしているのは。現象ばかり見てそれで、

「現象で、ありがたいありがたいとやつていれば御利益信仰になるぞ」

と。徴を取り違えては困りますよ。徴において本体を見ていかななくてはいかんですよ。本体を、いいですか。ただ現象を見ているのではない。見るばかりではなくて、徴を見たら本体の中に入ります、徴にでつくわしたら。

だから、「帰入」ということが非常に大事なことです。『無の神学』でもたくさん出てくる。預言者がいかに「帰入」「帰り入る」ということを言っているか。「シューブ」「帰る」という言葉です。

「キリストのもとに帰る。帰ることが前進である」

と。帰るのも、ただ門口ではダメなんだ。入らなくては。帰入しなくては。

●キリストという驚くべき神の徴

そこできつきの、十字架を通つて全部、自分がすつ飛びましたから、自我が無くなったから、そうすると、聖霊が入ってきた。これを祈りの世界でやってください。俄然、力が来てしまふから。

「なるほど、これが聖霊の現実だな」

ということが分かる。これは自分で体験するまではどうにもならない。百万言費やして説明したつてどうにもならん。お釈迦さんが、

「八千回も話をしたけれども一つも説かなかつた」

なんて言つた。ということとは、

「お前たちが自分でそれを体験するまでは、いくら聞いたつてダメだよ」

と。聞きながらその世界に入る。私は語りながら、その世界に入っているんです。聞くも



語るも同じことです。

今の4章に「第二の徴」が出ていたでしょ。第二どころではない。もうたくさんあるんだから。6章にも大変な徴がある。二つの魚と五つのパンでもって五千人に食べさせて、十二の籠かごに余ってしまった。

「¹⁴人々その為し給いし徴を見ていう『¹⁵実にこれは世きたに来るべき預言者なり』」
(ヨハネ6・14)

と。預言者どころのさわぎではない。誰がこんなことができるですか。海の上を涉わたったりね、まあ、大変なひとです。もう物理法則を完全に乗り越えている。霊的絶対次元の中に入っているから。

キリストに逆らっていたパウロが本当にその世界に入った。だから、彼は驚くべきことになった。何と言っても、第一の弟子はパウロです。まあ、パウロとペテロとヨハネはそれぞれの特徴で、いわゆる比較はできませんけれども。

だからもう、世界にどんなに本がたくさんあろうが、教えがあろうが、聖書一巻にはかなわない。キリストという驚くべき神の徴を中心にして展開している大ドラマだからね、それはかなわん。何が本当かと。

「もう聖書には参りました!」
と。そして、

「聖書を懐にしていると温かくてしょうがない」

と、そういう人にならなくては。

「読まなくても、何だか知らないけれども、力が来ます。私は身体で読んでいます。

目で読んでいません」

なんて。そういう、少し気違いになってくださいよ…(異言) …。

それが、十字架という驚くべき贖罪の徴を現し、復活体となり、聖霊となって、やがては新天新地を来たらせる大キリストですから。もうたまらんですよ。世の中のどんなものがあったって、驚きませんよ。キリストに驚いたら、もう他のものには。どんなものも全部。

だから大詩人ゲーテも、

「キリストの前には無条件に頭を下げる」

と言った。その通り。あれは死ぬ二週間前です。ドストエフスキーであろうと、シェークスピアであろうと、ユーゴであろうと、何であろうと全部、根源は、源泉は聖書から来ますから。ロダンも、レンブラントも、バッハも、ベートーヴェンもみんなそうだ。だから、この福音なんてものは限定のできない驚くべき無限無量なものだから、それを皆さんがいただいたら、生涯を通して表さなかつたらつまらんですよ。我々は生き甲斐は、このキリストの徴たらんことです。

もう、頭の問題じゃないです。本当にバカ者にならなくてはいけない。大ばか三太郎に



なると、キリストの徴となる。小賢しい人間の知恵なんてものではないですから。聖書は本当に身体で読んでくださいよ。もうたまらんですから。何と言ったって、福音書だね。これは聖書のアルファでオメガです。では、祈ります。

● 祈り

永遠より永遠にわたり神さまと共に私たちを創造しやがて完成し給うところの驚くべき実在者キリストさま。二千年前にどん底の生まれ方をなさり、本当の担いの愛がどのようなものであるかを、その地上の生涯を全部それを徴として表し、また、聖霊をもって世々のキリスト者を通して、人の見ると見ないにかかわらず、隠れたる徴をなしてください。祈ります。主さま、感謝いたします。私たちの日常の生涯そのものが、どうぞ、本質的には徴であることができすように願ひ奉ります。

兄弟姉妹たちとこのキリストの徴を焦点として、この降誕節を迎えましたことを感謝いたします。どうぞ、私たちはあなたの御光を受けて、その焦点となり火となり、またあなたの根源の生命をいただいて泉となつて、あるいは光、あるいは生命することのできる自由なる存在としていよいよそれぞれお使いくださらんことを願ひ奉ります。

このような聖霊の事態なくして、何のキリスト教かと思ひます。どうぞ、そのためには絶対に戦つていきます。そして、どうぞ、この戦いがいかに本当の意味で人を救ひあげていくものか、本当に包むものであるかを証しせしめ給はんことを願ひ奉ります。本当に素晴らしいキリストは私たちの一切でありたもう。

「我は今日も次の日も進み行くなり。昨日も今日も永遠に我は変わらざる者なり」

と。主さま、感謝いたします。どうぞ、東西南北からそれぞれの事情を乗り越えてきたこの兄弟姉妹たちのあなたに対する本当の祈りと愛とをいよいよあなたが報いてくださるよう願ひ奉ります。また、今日来れなかつた残念な兄弟姉妹たちがいますが、それらの人たちにこの音信を伝えることができますように。

また、U君のお父さんやH君のお父さんは今、非常な病の状態にありますが、どうぞ、その魂を両兄弟をとおして、そのお父さん方に魂の世界の光を、また救いを、力を与えてくださるよう切に願ひ奉ります。

かくして、本当にこのキリストを得ることは、私たちの相対的な生死を乗り越えた世界であることをいよいよ私たちは証しせずんばありません。

主イエス・キリストの御名を讃えつつ、兄弟姉妹たちの全身にあるそれと共に、イエス・キリストの御名により捧げ奉る。アーメン。

